

# 博物館 Dictionary No.227

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

てんじ  
展示中の作品について、研究員が分かりやすく解説します。

はす  
**蓮を愛する人は…**

蓮の花が咲いているのを見たことがありますか？ 画題となる蓮には、大輪の花を咲かせ根（地下茎）がレンコンとして食用になる蓮と、水上に浮かぶ睡蓮と大きく二つの種類があります。いずれも夏から秋のはじめにかけて、公園の池やお城の堀、お寺などで見かけることができます。中國の人たちは、大昔からこの蓮の花に心をひかれていました。紀元前にできた中国で最も古い詩歌集の『詩經』では、花の美しさから女性のすがた、また「蓮」と「恋」の音読みが同じであることから恋人を象徴する花としてうたわれています。詩だけではなく蓮の花を絵に描くときも、たとえば四葉のクローバーが幸運のしるしとなるように、古くからいろいろな意味を持たせていました。

中国の画題では、特定の花と歴史上の人物が強く結びつく場合もあります。こちらは中国・明時代の終わりに藍瑛という画家がえがいた「荷郷清夏図」（図1）です。「荷」は荷物ではなく、蓮と同じ意味をもつ漢字で、「荷の生えた水郷の清々しい夏をえがいた図」という意味の題名です。遠くに山がそびえ、大きな川に囲まれた静かな村の景色の中で、一体どこに蓮があるのかよくわからないですよね。実は岸辺に点々とある小さな丸が、水に浮かぶ蓮の葉っぱを表しています。画面の半分より少し上方に、三角屋根の小さな建物（水亭）があり、その中に1人の人物が座っていて、外の水面に浮かぶ蓮を見て楽しんでいます（図2）。どうして顔もよく見えないのに、この人が楽しんでいるとわかるか不思議でしょうか？ 実は中国の絵画には、決まつ



図1 重要美術品 荷郷清夏図 藍瑛筆  
長岡みゆき氏寄贈 京都国立博物館蔵

たパターンがあります。水辺で蓮の花を眺めている男性の姿を見れば、すぐに思い浮かぶ人は北宋時代の有名な学者である周敦頤です。

周敦頤は、韓国の国旗などにある「太極図(䷂)」の原型を作ったとされることでも知られていますが、もう一つ、『愛蓮説』という以下の文章でも有名です。漢文の読み方は少し難しいですが、後につけた訳を参考にしてみてください。

すいりくそくぼく  
水陸草木の花、愛すべき者甚だ蕃し。晋の陶淵明、独り菊を愛す。李唐自來、世人甚  
ほたん  
だ牡丹を愛す。予は独り蓮の汚泥より出でて染まらず、清漣に濯はれて妖ならず（中略）  
えんかん  
遠觀すべくして亵覗すべからざるを愛す。予謂へらく、菊は華の隠逸なる者なり、牡丹  
はな  
は華の富貴なる者なり、蓮は華の君子なる者なりと。

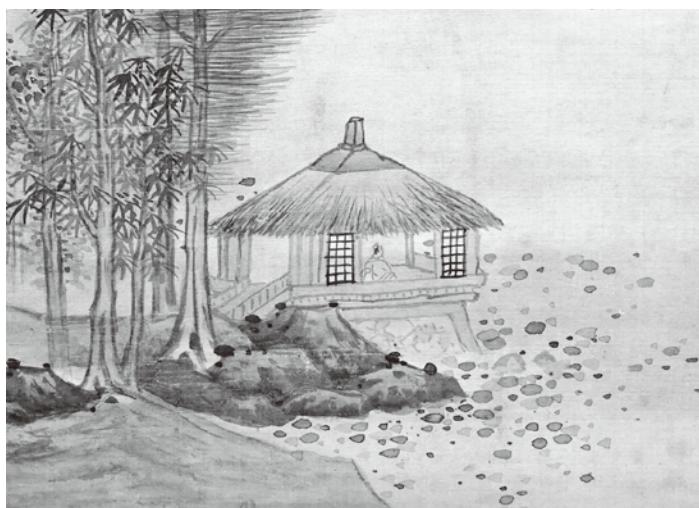


図2 荷郷清夏図 藍瑛筆(部分)

(訳) 水辺や陸に生える草木の花には、愛でるもののがたくさんあります。晋時代の陶淵明は、ただ一人、菊の花を愛しました。唐時代以来、世間の一般の人々は（豪華でおめでたい様子の）牡丹の花ばかりを愛しています。私はただ一人、蓮の花の、汚れた泥の中から生えてきても泥に染まらず、清らかなさざ波に洗われて上品であり、（中略）遠くから眺める

ことができても、近くで手に取ってもあそぶことができない様子を愛しています。私は、菊は花の隠逸の者（騒がしい世の中を避けてつつましく生きる人）であり、牡丹は花の富貴の者（富に恵まれて豊かな人）であり、蓮は花の君子（正しい行いをする立派な人）であると思うのです、と。

さて、この文章にどんな気持ちが込められているかわかりましたか？周敦頤は、世の中の人が牡丹ばかりを喜んでいるなかで、汚れた泥の中でも清らかに花を咲かせる蓮の花の方がよっぽど好きだと言います。そして、手に届かず、遠くから眺めているのがまた良いのだと。この『愛蓮説』の文章がたいへん有名となり、水辺で蓮を眺めている人物が描かれると、中国ではみな自然と周敦頤の姿を想像するようになったのです。あともう一人、陶淵明の名前が出てきましたね。周敦頤が蓮を愛したように、陶淵明も菊を愛したことでも知られています。中国の絵画で菊を眺めて喜んでいる人を見つけたら、陶淵明がイメージされている可能性が高いですよ。

(美術室 森橋なつみ)